

「共感」の意味を考えてみよう

あそう ゆうこ
麻生 裕子

●連合総合生活開発研究所・主任研究員

最近、「エンパシー」という言葉をよく聞くようになった。どうやら、あるベストセラーになった本でとりあげられたことがきっかけで、メディアなどで話題になっているらしい。一方、これに類似する「シンパシー」という言葉もある。いずれも日本語では「共感」と訳されることが多い。この二つの言葉はいったい何が違うのか。

辞書で調べると、「エンパシー」は、他人の感情や経験などを理解する能力、という意味をもつ。一方、「シンパシー」には、誰かを気の毒に思う感情、誰かの問題を理解して心配していることを示すこと、ある考え、主義、組織などに支持や同意を示す行為、同じような意見や関心をもつ人びとの間の友情や理解、といったたくさんの意味がある。どちらの言葉も一言で片づけられるような簡単なものではないが、要するに、「エンパシー」は頭で理解するもの、「シンパシー」は心で感じるものといっているのかもしれない。

「共感」という言葉は、労働組合でもいろいろな場面で頻繁に使われる。そのひとつに、労働運動の担い手には「共感」する力が重要だとよくいわれる。多様性を認め合い、包摂する社会づくり、助け合い、連帯する社会づくりをめざすならば、「エンパシー」も「シンパシー」も必要な力であるといえよう。すなわち、相手がどのような状況にいて、どのように感じているのかを、冷静に頭で理解し、温かい心で感じ

るということである。どちらが欠けてもいけない。

それでは、将来の労働運動の担う次世代の人たちがこの力を身につけるにはどうしたらよいのか。労働組合の多くの諸先輩に接すると、「共感」する力は潜在的に備わっているというよりも、労働運動での経験の積み重ねによって身につけていくという印象をうける。いずれにしても、労働組合での人材育成の課題については、さらなる研究や実践が必要だろう。労調協が実施している「次代のユニオンリーダー調査」にもおおいに期待したい。

もうひとつは、労働組合の運動方針やスローガンによく登場する「共感」という言葉である。この場合は、上述のように、支持や同意を意味する「シンパシー」をさす。私が気になっているのは、それは誰からの何に対する「共感」なのか、ということである。組合員からの「共感」なのか、それともさらに幅広く、未組織労働者や地域の人びとからの「共感」なのか。労働組合自体に対する「共感」を得たいのか、それともその先に一歩進んで、連帯社会や包摂社会をつくる運動自体に対する「共感」を得たいのか。それによって、労働運動の広がり方がかなり異なってくる。しかし現状では、労働組合自体の存在感を示すことで精一杯なのかもしれない。幅広い「共感」をうみだす運動につなげるために、あらためて「共感」の意味をもっと考えてみてみてもいいのではないだろうか。